NFRC mini Information

長野県林業総合センター ミニ技術情報

№１６ 平成１１年９月 ＳＥＰ.1999

長野県林業総合センター 塩尻市片丘 5739
Nagano-prefectural Forestry Research Center
TEL 0263-52-0600 FAX 0263-51-1311

# サクラのがんしゅ病害

キーワード：サクラ、がんしゅ症状

最近現地診断したサクラの病害に２種類のがんしゅ性病害がみられました。この２種類のがんしゅ性病害の特徴と対策について解説します。

## １．がんしゅ病（癌腫病）

### 症状

サクラ類、カンバ類、ヤチダモ、ナラ類、カエデ類などの広葉樹を侵す多犯性の病害で、葉柄痕、枯死枝痕、および傷口から病原菌が侵入発病し、病斑の拡大と患部周辺のゆ合組織の形成が繰り返され、凹凸の激しい典型的な永年性「がんしゅ」を形成します。また、「がんしゅ」を形成した患部は腐朽病害の侵入門戸となるとともに、周辺の死んだ樹皮や露出した木部に「子のう殻」を形成して新たな伝染源となります。なお、「がんしゅ」が多数形成された枝、幹は枯死する場合があります。

**永年性「がんしゅ」の典型症状**
**オオヤマザクラ枝部**

### 被害対策

**「がんしゅ病」**に罹病した立木の「がんしゅ」が巻き込んで治癒することはなく、患部を削り取る等の外科的治療を行っても、治療した患部が癒合することはありません。

成長休止期（11 月下旬から３月上旬）に、罹病枯損した主幹および枝はすべて切除焼却し、残存する枝の中で「がんしゅ」が多数形成されている枝についても切除焼却します。なお、切除した切口にはトップジンＭペーストを塗布します。

## ２．根頭がんしゅ病

**症状**

サクラ類、バラ、クリ、クルミなどの広葉樹、ヒノキ属、イチイ属などの針葉樹を侵す多犯性の細菌性土壌病害で根や幹の地際部に球形～半球形のコブ（がんしゅ）を形成し、コブは樹木の成長とともに年々大きくなります。

**「根頭がんしゅ病」**は、土中のコブやコブがくずれた組織を伝染源として、苗木を植え付けた際の傷や接ぎ木の接合部から感染して発病し、、生育が不良となって衰弱し、胴枯病などの余病をおこしやすくなります。
また、地際部のコブが強度的な弱点となり、冠雪や風による折損も発生しやすくなります。

**根頭がんしゅ病の症状**

**被害対策**

**「根頭がんしゅ病」**に罹病した立木のコブを切除しても、土中に残った被害木のコブやコブがくずれた組織から再感染するため治癒することはありません。

被害木は早期に根元周囲の土壌とともに掘り取り焼却します。被害跡地に植栽する場合は、クロルピクリン剤で土壌消毒した土を客土します。また、被害予防の点から、無病苗木を用いることが大切であり、苗木の根際をよく検査し、接ぎ木苗木は特に注意する必要があります。

苗畑で発生した場合は、苗木はすべて掘り取り処分するとともに、クロルピクリン剤で土壌消毒を行います。

なお、これらの病害の他にサクラの病気としては、ソメイヨシノ、コヒガンザクラなどがかかりやすい**「てんぐ巣病」**や、木を枯らしてしまう**「ならたけ病」**などの病害があります。特に**「てんぐ巣病」**はサクラによくみられる病害ですので、**罹病している枝は成長休止期に、てんぐ巣症状を呈している基部のコブより幹側で切除して、切口にトップジンMペーストを塗布しておきましょう**。

担当者　育林部　岡田充弘